

ている。叢島の藤左衛門尉が運送した。平賀氏は大内義長から津隈庄代官職を与えられていたのであろう。

第三節 蒙古襲来と鎮西の御家人

一 文永・弘安の役

(一) 文永の役

フビライの使者 モンゴルの皇帝フビライは高麗を完全に服属させると、一二二六六年（文永三年）、黒的と日本の対応 らに朝貢を促す国書を持たせ、日本に向かわせた。

高麗はモンゴルの使者を巨済島まで案内したが、海上はるかに対馬を見て引き返した。翌年、フビライは高麗に命じて使者を大宰府の少弐資能の下へ送り、国書を手渡させた。国書には、使節を送って親睦を図るべきことを求め、通交しなければ武力征服をする旨が書かれていた。

少弐資能は国書を鎌倉に送り処置を仰いだ。幕府は六十三歳の執権北条政村とまだ十八歳の時宗がその職を交替して難局に対処することにした。幕府は先例に照らして、国書を京都へ送った。朝廷では、連日論議して一か月以上過ぎ、回答を行わないことに決した。



北条時宗の花押

数か月待っても回答を得られない高麗の使者はむなしく帰国した。

モンゴルの使者は一二六八・一二六九年と日本へやってきたが、幕府の態度は変わらなかった。一二七一年には、趙良弼を使者として、最後通告ともいべき国書を日本へ届けさせた。趙良弼は四年間にわたって高麗と日本の間を往復したが、徒勞に帰した。

元の襲来

高麗の三別抄という軍隊の反乱を鎮めたフビ

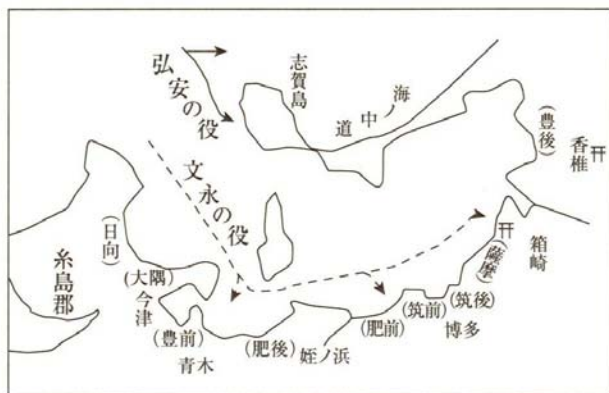
ライは日本出兵の準備にとりかかった。一二

七四年（文永十一年）正月から、高麗に命じて軍船九〇〇隻を役夫三万五〇〇人を動員して建造させ、元軍二万五〇〇〇・高麗軍八〇〇〇、水手七〇〇〇の混成軍四万余を編成して、忻都・洪茶丘・劉復亨らを指揮官として、十月三日、合浦（馬山）を出航、五日には対馬を襲って、少貳氏の守護代宗資国以下八〇余騎を全滅させ、十四日には壱岐に到着し、少貳氏の守護代平景隆ら一〇〇余騎を全滅させた。

十九日、博多湾に姿を現し、二十日早朝から今津を手始めに、百道原・博多・箱崎などに上陸を開始した。

日本軍の奮戦と元軍の撤退

日本側は、少貳経資の弟景資を総大将として、九州の武士を沿岸に配備し、各地で激戦が展



-----元軍侵入路 () 異国警固担当地

第2図 元寇侵入路と異国警固担当地

開された。日本軍は一〇〇年近い太平になれ、戦闘の経験に乏しいうえに、蒙古軍の戦なれと勝手違った戦法に苦戦した。すなわち、長槍を使う徒歩の集団戦法、短弓の速射・正確さ・飛距離・毒矢が、日本の一騎駆け、長弓の威力を圧倒し、「てっぼう」の爆発音に驚愕して戦意を阻喪した。

夕刻には、日本軍は戦い疲れて、大宰府へ撤退した。勇敢に戦った将兵の中でも、少弐景資の活躍は群を抜いて、敵將劉復亨を倒した。

翌朝、日本軍が博多に出てみると、異国の船影はなかった。前夜の大風雨で、海上の敵船に損害が出て、撤退を決めたのだという。旧暦の十月二十日は、太陽暦だと十二月初旬にあたる。このころの強風は旋風といわれる寒波で、風速二〇マイルに近い風が吹くことがあるから、そういう季節に元軍が襲来したということである。

元軍撤退の原因は、元軍に数倍する兵員の勇敢な戦いぶりを見て、戦力の不足を感じ取ったこと、強い逆風について漕ぎ帰ることの困難さを考慮してのことであろう。文永の役の蒙古側の損害は一万三五〇〇人という。

元軍退去のあと、幕府は九州各国の武士に、動員可能な兵員・武器・船数を注進させて、高麗遠征の準備を命じ、渡海しない武士には、筑前・肥前沿岸の石築地や乱杭の工事を命じた。建治元年（一二七五）には、蒙古襲来に備えての警固番役を九州諸国が分担する制規を定めた（第2図参照）。

また、次の戦闘の指揮官として、鎌倉から北条時定（為時）を派遣し、肥前の守護職を与え、武士の統制を強化した。

(二) 弘安の役

元の使者の処刑 一二七五年(建治元年)二月、フビライは杜世忠らに国書を持たせ渡海させた。この度と元の再襲来 は、大宰府へは行かず、四月十五日長門国室津に着き、京都へ行くこうとした。しかし、

大宰府守護所の手によって、鎌倉へ送られ、竜ノ口で斬首された。

一二七九年(弘安二年)、懸案の南宋を滅ぼしたフビライは、日本を属領化する目的で前回に五倍する兵力を準備して渡海させることにした。

モンゴル・高麗・華北人からなる東路軍の兵四万、船九〇〇隻に加えて、南宋の兵一〇万、船三五〇〇隻の江南軍は、阿刺罕を総司令官として、忻都・洪茶丘や范文虎の指揮下に、日常調度や耕作用具までも準備して、長期戦をも想定していた。

東路軍は、一二八一年(弘安四年)五月三日に合浦を出発し、対馬・壱岐を屠り、六月初旬、博多湾頭の志賀島に一部が上陸した。一隊は長門方面へも姿を見せた。

戦いの様子と 日本軍は陸上からと、海上から志賀島へ向かい、果敢に戦いを元軍の壊滅 挑んで、東路軍を苦しめた。

志賀島で敗れた東路軍は、伊万里湾の鷹島へ移動したが、六月末江南軍の先遣隊三〇〇隻が対馬へ到着したと聞いて、東路軍の一部も壱岐島へ向かい合流した。これを聞いた八十四歳の老齢の少弐資能(入道覚恵)や、孫の資時らも壱岐へ渡



少弐資能の花押

り、合戦を指揮し、資能は深手を負って戦没した（相田二郎『蒙古襲来の研究』。資能は七月十二日博多の合戦で重傷ともいう）。

江南軍は、阿刺罕の病氣更迭（うつりか）などのために出航が遅れ、老岐島で、東路軍と合流する予定が狂って、六月下旬、ようやく平戸島に到着し、七月下旬、伊万里湾の鷹島付近で両軍は合流した。江南軍は防備の手薄な肥前の平戸付近への上陸を目指したらしい。

上陸開始間近の閏七月一日、大風雨に見舞われ、大半の艦船が漂没した。范文虎など元軍の諸将は、被害の少ない船に乗り替え、部下を捨てて逃げかえり、生き残って鷹島へ上陸した者も、博多湾から移動してきた少弐景資を大将とする日本軍の掃討に遭って多くが討たれた。捕虜（ほりこ）となった者は博多へ連行され、蒙古・高麗・漢人は斬首されたが、南宋人は奴隸とされた。

二 第三回の襲来計画

フビライの フビライは二回の失敗にも懲りることなく、一二八二年（弘安五年）九月、高麗や江南の揚州・泉州などに、大船三〇〇艘（せう）の建造を命じて、再征の準備を行った。翌一二八三年、兵

糧二〇万石を用意させ、八月には日本へ渡ることになった。しかし、国民の疲弊を訴えて反対する者があつたり、ベトナムの占城で民族的抗戦がぼつ発したりなどによって渡海は延期され、一二八四年五月、征東行中書省も廢止されてしまった。